

研修だより

矢島小学校

No. 23

05.10.25

指導力の復権に目覚めよう

ちょっと前まで、「支援」「援助」という言葉が、教育界に蔓延していました。「教師は指導をしてはいけない、支援に徹すべきだ」などという、今では信じられないようなことを言う人が少なくありませんでした。このことが現在の教師の指導力不足に拍車をかけたという指摘には、うなずけるものがあります。

(ちなみに、「指導から援助へ」とか、「指導ではなく支援を」などという言葉は、文部科学省の刊行するどの書物にも、ちらりとさえ書かれていないそうです。)

先日、ある研究会で、昭和22年まで小学校教師は「教諭」ではなく「訓導」という職名だったというのを聞きました。「訓導」とは教師と子供の関係での「教える、教え」という意味です。

「不易と流行」の「不易」の部分が、「教える」ということではないでしょうか。

山極隆氏（玉川大学学術研究所教授）は、次のように言います。

小学校では「読み、書き、計算」を徹底し、そこでは教師主導で教科書を用い、反復訓練、音読暗唱を充実し、教師は教える職人に徹することが大切である。教育に美辞麗句や耳あたりのよい教育論、検証不可能なアドバルーンの打ち上げは無用である。

野口芳宏氏は、よい授業は次の3つを具有すると言っています。

- ① まず、子供に所期の学力を確実に形成していること (学力形成)
- ② その学習進行に、知的な面白さと考えることの楽しさが溢れていること。(学ぶ楽しさ)
- ③ そのことを通じて、人間としてあるべき生き方も学ばれていること。(人間形成)

そして、「指導力の復権に目覚めよ」として、次の点を主張します。肝に銘じたい言葉です。

教えるべきことはきちんと「指導」し、子供にやらせるべきことはきちんと「作業」させ、やらせてはいけないことは厳しく「禁止する」必要がある。そうすることが、真の「子供の側に立つ」ことなのだ。 『“活動主義の授業”はなぜダメか』(明治図書)